

南方徴用作家の言説

- <ジャワ>を中心として -

木村一信*

I

1941年12月、日本はハワイ真珠湾への奇襲作戦でもって、無謀なアジア太平洋戦争へと突入した。開戦に先立って、同年11月中旬、当時、旺盛な作家活動をしている文学者たちのもとに「徴用令書」が届けられた。その令書のもとになった「国民徴用令」というのは、戦時に際して、国防達成の目的のために、国家権力により国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させることのできる法令で、開戦の2年前の1939年7月に施行されている。それに先だって、1938年4月には「国家総動員法」が公布されている。明治期に施行されていた「国民徴兵令」とあわせて、これで、やがて来るアジア太平洋戦争の性格をよくあらわした総力戦体制が整えられたのである。

この折、「徴用令書」を受け取ったのは、文学者をはじめとして、画家や音楽家、ジャーナリストや映画人、さらに評論家、思想家、学者といった範囲にまで及んだ。いわゆる<文化人>たちが動員されることになった。1) ナチス・ドイツのPK隊(宣伝中隊)に倣って、にわか宣伝班が結成されたのである。宣伝班は名のある文化人たちや、士官等、また、兵隊、雇員らから成り、東南アジア・南

* プール大学学長、立命館大学名誉教授。

1) 桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争—PK部隊が行く』(青木書店、1993年7月)。

方の各地域へむけてそれぞれ百名前後からなる編成が組まれた。もちろん、軍と共に侵攻していく前線へと輸送船に乗って送られたのである。

P K隊に倣うという側面はあったが、それと共に、日中戦争の初期、内閣情報部の要請により、中国の前線へと著名な文学者を送りこみ、戦地の模様などの見聞記を書かせ、国民の戦意を昂揚させる任務を与えた「ペン部隊」の前例(1938年)も作用していたであろう。「ペン部隊」とよばれ、陸海軍と共に従軍した文学者としては、久米正雄、尾崎士郎、林芙美子、菊池寛、佐藤春夫、吉川英治、吉屋信子といった錚々たる人たちがいた。その中でも、林芙美子の前線における活動と帰国してからの言説や講演などは、国民の人気となって人々の注目を受けた。こうした「ペン部隊」の言説による活躍は、内閣情報部の思惑をこえるほどの効果があったと言えよう。

アジア太平洋戦争開戦にあたっての今後の宣伝班創設には、その折の記憶もあったことと思われる。日本近代文学史上、「南方徴用作家」とよばれる一群の文学者たちは、いまの東南アジア・南方各地、すなわちジャワ・ボルネオ(現在のインドネシア)、マレー(現在のマレーシア、シンガポール)、ビルマ(現在のミャンマー)、フィリッピン(以上、陸軍による派遣)、また、当時、「内南洋」と称されていた南洋群島や、バリ島・チモール島などの島々(海軍による派遣)へと、三期に及んで送られたのである。文学者に限れば、約60人から70人ほどを数えることが出来る。²⁾

彼らは、派遣された地域において、いわゆる文化工作に従事することを命じられたが、その職務内容として、主に次の三点を挙げることが出来る。第一は、対占領地への宣伝(民衆の宣撫や日本語教育など)、第二は対軍隊への宣伝(日本軍の将兵に対しての戦意昂揚、聖戦思想の普及など)、第三は、対敵への宣伝(敵国に向けた放送など)である。具体的には陣中新聞を発行し、現地語による新聞も刊行、また、日本語学校やラジオ放送、映画制作なども手がけられた。さらに、彼らは、日本のマス・メディアにもしばしば登場し、前線での戦いぶりを報道し、また軍政による統治後は、各地域の社会・文化・風物などについての文

2) 神谷忠孝「序論」(神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学』所収、1996年3月刊)。

章が新聞、雑誌などに載せられた。

そうした徴用された作家たちの言説の多くは、日本の敗戦後、作品集や全集にすら収録されることなく、いわば隠蔽に近い形のとられることがしばしば見受けられた。現在は、そうした文章が書かれたという事実、また歴史的・文学的資料として公にする必要があることから、初出誌(紙)からの発掘、復刻版にしての刊行、「南方徴用作家叢書」の発刊などの作業が進められている。³⁾

前述したように、アジア太平洋戦争時の日本は総力戦体制をとって、政治から社会、文化、生活などすべての面において規制を加えた、挙国一致による戦争遂行を行っていた。その中で、見逃してはいけないのは、当時の文化人たちのみならず、国民の多くに影響を与えた、1940年8月に、第二次近衛文麿内閣の外務大臣であった松岡洋右によって提唱された「大東亜共栄圏」という言葉、あるいは理念である。⁴⁾たとえば、火野葦平は、「少国民」向けの作品『ヘイタイノウタ』(1943年)において、「きたは、アリューシャンから、みなみは、ソロモンのはてまでも、日本のゆうかんなへいたいさんは大君のおんために、いのちををしまず、たたかつてゐます」と書き、日本の領土拡大政策はとりもなおさず、アジアの解放を謳う「大東亜共栄圏」思想と合致するとプロパガンダ的表現をなしている。また、詩人の草野心平は、「あきつてサハイさんはマニラにとぶ。/間もなく私は南京にとぶ。/どこかでまた会へますね。/どこかでね。中国かビルマか泰(タイ)か。/或いはひよつとすると印度(インド)の何処でか。」(「大きな夕焼けを眺めながら」、1943年)と詩い、タイトルにある「大きな夕焼け」の語に象徴されるように、やはり、「大東亜共栄圏」という言葉のもたらす幻想に陶酔し、一種の浮かれた気分支配されていたことがうかがえる。思想家の清水幾太郎も、この期、「大東亜共栄圏」を盛んに喧伝する文章を書いていた。

かつて、神谷忠孝は、「徴用作家たちの記録や作品」を、次の五つのパターン

-
- 3) 後藤乾一・木村一信編集・解題、復刻版『赤道報・うなばら』(竜溪書舎、1993年9月刊)や、木村一信編集・解題『南方徴用作家叢書 ジャワ篇』(全15巻、竜溪書舎、1996年10月刊)。木村一信・竹松良明 編集・解題『南方徴用作家叢書 ビルマ篇』(全14巻、竜溪書舎、2009年12月刊)などがある。
- 4) 拙稿「大東亜共栄圏と文学者」(『時代別日本文学史事典 現代編』所収、東京堂出版、1997年5月刊)。

に区分した。すなわち、①体制の目によって都合のよい部分だけをみて報道するもの、②情報や伝聞による先入観を現地で確認しているもの、③南方を占領していたアメリカ人、ヨーロッパ人など、白人への憎悪をあらわにしているもの、④現地の人と接触することによって、直接的に情報を収集し、正確な記録を残そうとしているもの、⑤自己の感性をたよりに印象を書いているもの、などである。このようにまとめた神谷は、続けて、「①から③までが圧倒的に多いが、④と⑤をあわせたようなところで記録をのこしたものは今日でも読む価値がある」と述べている。⁵⁾ 火野や草野の言説は、①から③までがあわさったものと言えるであろう。徴用作家たちのほとんどの文章は、神谷の言う①から③までのものである。しかし、敗戦後にもすぐれた文学的活動を持続した作家たちの中には、軍部に迎合せず、戦争賛美に終始しない言説を、制約の厳しいところで表現しえた例もいくつか見受けられる。以下、三つの地域に赴いた三人の作家とその所産である作品について、具体的に述べてみたい。

II

2.1. マレー(シンガポール)の場合

2.1.1. 井伏鱒二

1942年2月15日、シンガポールのイギリス軍は、日本軍に降伏をした。この地を「昭南島」と改称して軍政を行なった日本軍は、華人を虐殺するなどの圧政を敷いたが、その中であって井伏鱒二は、主として日本語普及活動に従事した。詩人の神保光太郎らと共に「昭南日本学園」を開設、運営するが、井伏が見たものは、統治下にあっても日常性と逞しさを失わずに生きようとする庶民の姿であり、また街の様子であった。井伏は、人間の愚かしさや悲しさを、ユーモアとペーススにくるんだ淡々とした文章でもって表現した。彼の徴用体験に基づくエッセイや小説の中に、人間の本質を捉えようとする勁(つよ)い作家精神がうか

5) 「従軍作家の戦地」(『北海道新聞』、1983年8月20日)。

がえよう。

2.1.2. 作品『花の町』(小説1943年)

平静をとり戻したシンガポールの町には、日本軍の宣伝班による日本語学校が開かれ、そこに日本語を学ぶ現地の人々が集う。日本語は、彼らにとって生きるための手段なのである。一人の生徒の一家と、主人公(私)との交流を通して、統治下での人々の日々の暮らしと庶民の喜怒哀楽とが描かれている。主人公の飄々とした生き方、人柄は、平常心や観察の力を感じさせ、戦争への静かな抵抗すら見てとれるだろう。

2.2. ビルマ(ミャンマー)の場合

2.2.1. 高見順

軍の戦闘部隊と共に苦難の末にタイの国境を越え、ビルマの都ラングーン(現ヤンゴン)へと侵攻した高見順は、克明な日記を書き続けていた。平静をとり戻したラングーンでは、高見は、映画の検閲やビルマの文学者たちの会を組織したりする仕事に携わり、また、この地の文化や風俗、習慣、人々の様相などに旺盛な好奇心を抱く。仲間から揶揄されながらもインド人の使用人を信用し、欺かれ、なお、ビルマや、近隣の地域と人々を愛そうと努める。人間への信頼や愛情を貫くことに自らの文学の基点を置き、また、文章表現に自己の存在を賭けて生きようとする。その確信を、高見は徴用生活の中で手にするのである。

2.2.2. 作品『ノーカナのこと』(小説、1943年)

ビルマに滞在時、作家仲間たちの雇い入れていた一人の使用人と(私)とをめぐる話。〈私〉は、いくら裏切られてもノーカナ(使用人)を信じようとする。そこに、自らの拠って立つ、文章を書くという一点に賭けようとする意志も重ねあわされているのである。

2.3. ジャワ(インドネシア)の場合

2.3.1. 阿部知二

阿部知二は、乗っていた輸送船が敵の魚雷攻撃を受けて沈没し、海上を漂ったのち上陸するという体験をした。が、戦闘はわずか9日間でおわり、ジャワは秩序をとり戻す。結核を再発した阿部は、〈敵性凶書の調査〉やオーストラリア向け放送のチェックなどの閑職に就き、もっぱらジャワやバリ島の文化、歴史などの研究に取り組む。西洋的雰囲気溢れる都市バタビア(現、ジャカルタ)と、熱帯地方の自然と安穏さ(主として官能的なもの)とに魅了される。英語の堪能な阿部は、ヒューマニズム精神から敵性国の人々や捕虜を保護しようと尽力するが、軍との板ばさみとなり苦しむ。西洋への憧れ、官能への耽溺、ジャワ文化への親炙など、阿部の徴用体験に基づいて書かれた作品の世界は意味深いものがある。

2.3.2. 作品『火の島——ジャワ・バリ島の記』(エッセイ・評論集、1944年)

作者の上陸時の体験を回想する文章、ジャワ、バリ島を巡った紀行文、ジャワの文化や風土、宗教などを論じたものと、多岐にわたる文章が集められている。ここに一貫するのは、ジャワの文化に寄せる関心である。その奥底には、ジャワの風土、自然、人間に強く魅せられた作者の思いがあるのだが、それはまだ十分に表現されておらず、戦後の小説〈ジャワもの〉に存分に描かれるのである。

III

上に紹介した三人の文学者のケースは、前述の神谷の言う④、⑤にあたり、それぞれの個性を有した「作家精神」に貫かれていて、文学史上、評価できるものである。いま少し、ジャワへ派遣された北原武夫という作家の文章を取り上げて、北原の場合について論じてみたい。

(略)何しろ敵前上陸した生まれてはじめての土地だから誰も知つてゐるわけは

ない。さてどうしたものか、と全く途方に暮れたが、一ジャワの密林の、熱気と硝煙の気の満ちただならぬ戦場風景の中で味はつた、あの何とも言へない気持は僕は今でも忘れることができない。あの時、もし途中で、船中で知り合った顔見知りの憲兵に会わなかつたら、僕等はその日のうちに命令されたその集結場所の部落に、恐らく無事にゆき着くことはできなかつたであらう。「何です、二人でこんなところをうろうろしてゐて、一体何処にゆくんです？」

ある小さい部落の入口で、樹蔭の小屋の中で休憩してゐたその憲兵の曹長に不意にさう声にさう声を掛けられ、そこでラグサウーランにゆく道をはじめて詳細に教えられ、その上そその上その途中まで荷物だけはトラックに載せて一ト足先に運んで上げると言はれ、僕もれ、僕も小野君も、漸くホツと一ト息つくことができた。

「駄目だよ。俺達は、かうはつきり戦争になると、てんで恰好がつかないね。一宣伝班なんてのはまるでおまけみてえなものだー」

そこで一ト休みしながら、小野君は少し元気を回復してそんなことを言つてゐたが、(略)(北原武夫『ジャワ従軍記 雨期来る』、1943年)

いま引用した文章の書き手である北原は、阿部知二や武田麟太郎らと同じく、ジャワ派遣の宣伝班員の一人であった。漫画家の小野佐世男と共に乗っていた輸送船は、敵の魚雷攻撃をうけることなく、戦闘の中をジャワ島へと上陸に成功する。が、混乱のさなか、北原たちは右往左往するばかりで、班の集結場所さえもわからない。その折の様子を記したのが引用文であり、にわか作りの宣伝班の、軍での位置がわかるであろう。実際、南方の軍政地において、彼らの果たすべき役割は、それほど明確に定められていたわけではない。将兵からなる軍としての宣伝班の中に、文化人として著名な者たちが組み入れられ、宣撫・宣伝活動に従事したが、そのノウ・ハウや任務についての蓄積はまったくなかった。いわば、手探りで彼らは占領地、統治地での仕事をなしたのである。

たとえば、戦後になって阿部は、〈結局、この宣伝部隊は、悲劇というよりは喜劇——個のファールスではなかったろうか〉と述べた。(『レット・ルース』、『文学界』1955年9月)。そして、また、〈しかし、一つの感嘆すべきことがある。

じっさい、いつか北原武夫が『みな、やるだけのことはやっている。えらいものだ』と嘆声を発したのを忘れるべきではなかろう。というのは、それぞれのものが、その本性に従って、善にあれ悪にあれ、あらゆるところに出没し、あらゆることをしたのである>とも記した。小野の口にしたく宣伝班なんてのはまるでおまけみてえなもんだ>との科白は、いちめん、文学者たちの実践における戦争関与のさまを端的に示していよう。また、日本語や皇国思想の普及活動、アジアの解放、大東亜共栄圏といったスローガンを掲げてのプロパガンダ的役割を演じさせられた作家や画家、音楽家、ジャーナリストの多くは、戸惑いのただ中にいたとは言っても、戦地を体験し、「徒手空拳」でもって宣伝活動に取り組み、<文士の面目>(阿部の言)を表した彼らには、こうした戦争への関わりがどのような意味があったのか。

北原は、ジャワ滞在中、ジャカルタから中部・東部ジャワへと車による視察旅行を行なった。その折の見聞が、「雨期来る」の中核をなしているが、北原の心を捉えたのはジャワの気候風土であった。特に、中部ジャワで目にした今も活動する火山には圧倒され、<生れてはじめての自然の壮大さ>と表現する。さらにまた、帰国後に、北原は、ジャカルタの宿舎の卓上にあった一輪の薔薇を思いおこす。その折、ある啓示が浮かんだという。すなわち、<僕は思はずそれを自分の口に出して、一人でつぶやいたものだ。僕は、言ひ難い確信で、身体が疼くやうな気がした。(中略)一輪の薔薇の美しさを描くことは男子一生の仕事に足るのだ>と。

北原が、<おまけみてえな>位置におかれながらも、「確信」をもって発見したのは、壮大な自然のもつ威力と、その一方、一輪の花の美しさのかけがえのなさであった。それを描出するところに文学者の存在意義があるとの自覚を、北原は、ジャワの地において手にしたのである。これは、戦地にいるところから来る一時の感傷や逃避からきたのではない。「確信」をもって思いいたったという「一輪の薔薇の美しさ」を表現することが「男子一生の仕事」に値するとの自覚は、見逃されるべきではないであろう。帰国後に発表されたこの文章は、雑誌の文芸時評においてであった(『文芸』1943年5月)。もちろん、検閲の対象になっている。

現代のある小説家はその作品中に、当時、東条英機が「いまは薔薇を作る秋ではない」と語ったとのエピソードを記している(小林信彦『ぼくたちの好きな戦争』)。その真偽のほどははまだ確かめてはいないが、北原が発言したのは、そうした時勢のただ中においてであったのである。我が国の戦時下における体制への抵抗は、一部を除いて、ほとんど当局の弾圧と検束、拘留とによって骨抜きにされていたと捉えられている。文学界も例外ではなく、古くは荒正人、また小笠原克の言⁶⁾にあるように、「抵抗」「非順応」はほとんど見られなかったのである。その中で、北原は、「芸術を守る」姿勢を敢然と打ち出している。

敗戦後、文学者の戦争責任論議が激しく交わされた時、北原は、「たった一つの単純な事」という文章を書いている(『人間』創刊号、1946年1月)。そこで、「節操とか、迎合したとかしないとか、そんなところには、そんな水準には、元々芸術の問題はないんだよ」と述べていた。ジャワでの「確信」の延長線上にこの意見があることは、明白であろう。戦争下という悪気流の渦巻く時代・社会の中で、屹立する「作家精神」を打ち立てた北原は、一つの「非順応」へとつながる可能性を有した作家と見なすことができるであろう。私たちが、こうした戦争に関わった作家の研究を進めるにあたって何より心がけなければならないのは、政治的立場やイデオロギーによる安易な裁断や反体制的言説による高みからの評価をしてはならないということだと思ふ。もし、その場に自らが置かれていたとしたらどうであったらうかとの想像力が必要であろう。東南アジアの思想や文化のすぐれた研究者であった今は亡き土屋健治(京都大学教授)は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(原著、1978年刊)を援用して、「そのことを問うている汝自身を先ず問え」との姿勢を自らの研究の原点に置いていたことを想起する。

「南方徴用作家」研究は、近年、研究者も増え、盛んになってきているが、何より第一に資料的整備必要であり、作家一人ひとりの文学的生涯を見据え、戦争に関わった中での言説を同時代の言説と照らし合わせて検証がなされなけれ

6) 小笠原克は、「昭和10年代において、表現をこととする文学者に、積極的な抵抗や非順応を表現しえたものは皆無に等しかった。それゆえに、順応の度合は懐疑の深淺によって測るしかない」と述べている(『昭和10年代の文学』、紅野敏郎他編『昭和の文学』所収、有斐閣、1967年4月刊。付記 本稿は、吉田熙生・曾根博義・鈴木貞美編『日本文芸史』第七巻・現代I(河出書房新社、2005年10月刊)所収の拙稿「南方軍政下」と重複する記述のあることをお断りしておきます。

ばならない。そして、私たちには、文学研究における歴史的認識として理解し、そのうえで評価をなしていくことが要請されているであろう。